

八重山戦後開拓集落と母村との間の親族間交流の変容

The Transformation of the Contacts among Relatives Who Live in the Post-War Settled Village and Its Original Village (both in Okinawa) Respectively

越智正樹（京都大学大学院農学研究科 博士後期課程）

【ねらいと目的】

沖縄県八重山郡西表島のある戦後開拓集落（住吉）は、本年 10 月に入植 60 周年を迎え、記念祭を盛大に催す。本研究の目的は、同祭における母村（宮古島旧下地町）との関係の再構成を分析するとともに、日常における移住者家系と送出元との親族間交流のありようを調査することによって、占領期沖縄の県内開拓移住に伴う親密圏の変容を明らかにすることである。

開拓移民と母村との関係というテーマは、海外移住については諸業績が蓄積されてきた。国内開拓に関しては、内地戦後開拓集落や北海道開拓集落についての研究がある。しかし八重山戦後開拓集落については、そもそも社会学的調査の蓄積が乏しく、上記テーマに関する研究に至っては皆無に等しい。だが、八重山の現代社会（戦後開拓部落の割合が高い）を考察する上でも、沖縄出身移民全体の意味を把握する上でも、戦後県内開拓の実態調査は重要である。

住吉の入植者たちと母村の親族との交流は、現在では密とは言えないようである。郷友会も存在しない。その一方で、入植記念式典のようなローカリティ表出の場においては、母村とのつながりの再確認と再構成が行われている。この実態の調査により、開拓移住者たちが、母村との親密性をいかに再編しながらローカリティに組み込んでいるか、を明らかにしたい。加えて、人的移動に伴う親密圏の変容という、より一般的な問題系を考察するための知見を得たい。

【活動の記録】

2008 年 10 月 8 日～13 日 第 1 回調査

調査地：沖縄県竹富町西表島 調査目的：入植 60 周年記念祭の記録、および親族関係などに関する聞き取り調査。

12 月 15～19 日 第 2 回調査

調査地：沖縄県那覇市 調査目的：他出 2 世への聞き取り調査、および沖縄県公文書館にて資料調査。

2009 年 2 月 13 日～3 月 5 日 第 3 回調査

調査地：沖縄県竹富町西表島、石垣市、宮古島市

調査目的：親族間交流等に関するアンケート調査（西表島住吉）、竹富町役場等での資料調査、および西表島住吉現住者や石垣島現住元琉球政府職員、在宮古島親族への聞き取り調査。

【成果の概要】

まず親戚関係の構造的側面では、入植隊員間と比べて、現住 2 世間の親戚関係は多く複雑になった。そのキョウダイの 2/3 は島外に移出しているが、宮古島への還流はごく少数であった（約 2%）。もともと現住 2 世と、宮古島の最も親しい親戚との交流頻度は、決して低くはなかった。次に機能的側面について、旧盆の島間訪問は（本家がどちらの島にあるとも）ほぼ皆無であった。すなわち家的結合は弱い、と言える。また現住 2 世にとって、宮古島の最も親しい親戚であっても、援助依頼や相談の相手としては優位でなかった。以上より、現住 2 世と宮古島の親戚との関係は、家的結合や生活上の連関（援助・相談）は乏しく、個人的情緒的な交流関係が保たれていると言える。

さて入植 60 周年記念祭の式典・祝賀会には、宮古島市教育長が参加した一方で、宮古島の親戚は全く参加しなかった。すなわち入植記念祭は、上記の親戚間交流の場ではなかった。ただし島外他出 2・3 世の一部は参加した。この祭事の特徴は、まず本土出身移入者も同列で運営の中心に加わっていること、そして式典・祝賀会の様々な局面に宮古的なもの（言葉・歌・踊り）が配置されていることである。住吉では母村の祭祀や文化の明確な継承・復興はなく、入植記念祭は宮古らしさを表現するほぼ唯一の場といえる。つまりこの地縁的祭事において、母村との関係が再確認されているのである。

親密圏を血縁・家族関係に限定するならば、母村との親密圏は、他出 2・3 世とのネットワークや地縁関係に比して縮小傾向にあると言わざるを得ない。しかし、母村はその重要性を失っているわけではない。母村との関係は、流動的状況下（他出・新規移入）における地域的（地縁・血縁）親密性の象徴として再構成され、その重要性の質を変容しつつ保っていると言えよう。